

址を除くと、資料的に使用できるのは55棟ある。そのうち柱穴が1基も検出されない住居址は17<sup>(31)</sup>棟あり、さらにピットは検出されるが主柱穴と断定できないものや、主柱穴も1基又は2基しか確認できないもの（住居址中央柱穴を有するものは除く）を含めると40棟あり、約73%の割合で主柱穴の不明確な住居址が存在することがわかる。

形態は、隅丸方形が多いが方形、隅丸長方形等いろいろなプランも知られている。規模は、第17図に示したように小型～超大型<sup>(32)</sup>まであり、この分類からはみだした住居址には五ヶ城遺跡第3号住居址があるが、これは形態が台形で方形プランから著しく異なるためで、他の住居址はほぼ方形に近いということもうかがえる。規模の分布は、小型7棟、中型33棟、大型13棟と超大型1棟となり、この時期佐久地方では中型の住居址が一般的規模といえそうである。

4隅に柱穴を有する住居址の分布を見ると（超大型規模の蛇塚B遺跡H4号住居址は、北西隅に柱穴が検出されていないが、ちょうどその部分に攪乱があり、もし仮りに柱穴があったとすれば同遺跡H3号住居址と同様カマドの上に柱があったと考えられる4本柱の住居址と思われ、その意味ではH3・4号住居址も含めて）、中型2棟・大型7棟・超大型1棟となり、資料数が少ないため速断はできないが、大型住居址に多く存在することがわかる。

柱穴が1基も検出されない住居址の分布を見ると小型住居址7棟のうち5棟を占め、中型に11棟存在するが中型の中規模程度から小型に近い方に多く存在することが見てとれる。しかし、ピットは検出されるが主柱穴と断定できないものや、主柱穴も1基又は2基しか確認できない住居址は、小型～大型の住居址に満遍なく存在し、規模による偏在は見られない。

上述のように、平安時代における住居址の主柱穴の在り方を中心にしてきたわけであるが、主柱穴のはっきりしない住居址は全体の7割弱に達しており、あるいは（主に小型住居址）主柱のない上屋構造の研究を行わなければならないと考える。また、少数ではあるが住居址中央部に柱穴を有する住居址についても注意してゆきたい。

### 3 高地集落

平安時代に見られる山地の集落で、最初に注目して報告されたのは、昭和32年「長野県埴科郡松代町西条地区入組稲場遺跡調査概報」である。その中で、永峯光一氏は「調査は早期縄文土器の発掘に主眼を置いたのであるが予期に反して……新しい土師器と灰釉陶器とを伴う竪穴住居址二箇を発掘する結果となった。然し、現在においても、主要な附近の農耕聚落に較べ、遙かに山深い高地に、土師器や灰釉陶器を伴う竪穴住居址を確認したことは、これまであまり注意されていない歴史時代初期村落の性格の一面について、探究の端緒となり得るものであらうと考えている。……決して農耕適地とは考えられない山奥に、土師器や灰釉陶器を伴う竪穴住居址が数箇も存したことは、そこに当然農耕以外の生業をもつて少なくとも半定住的な生活を送った人々の居

住……律令制から庄園制への過渡的な時期に際しての歴史的動態からも理解されるべき面をもっているのではなかろうか」と高地における平安時代住居址の存在を指摘した。その後、幾つかの報告例がなされ、昭和43年、桐原健氏がこれらを集成・分析して「平安期に見られる山地居民の遺跡」の中で初めてこうした遺跡の性格について言及した。

その中で桐原氏は、まず、「信濃遺跡地名表」(1956)と「全国遺跡地図―長野県―」(1967)を併用して、県内における水稻農耕を生業とするには不適な地に営なまれている遺跡を指摘し、北信地域は73遺跡、中信地域の松本平には32遺跡・木曾谷では35遺跡、東信地域では佐久地方である碓氷の山付近の谷筋の7遺跡を含めて11遺跡、南信地域の八ヶ岳周辺に30遺跡、伊那谷は水稻農耕を生業するには不適として除き、山中で営なまれている170遺跡が平安時代の全遺跡の14%を占めているとし、該期の民衆の生活を考える上に忽がせにできない数値であるとしている。

さらに、県内の山上遺跡の調査例7遺跡の分析を行ない、1、遺跡の規模が小さい。2、竪穴の規模が小さくカマドもラフで全体に安直にできている。3、竪穴の重複例が多い。4、どの遺跡からも灰釉陶器が出土しており、出土例は少ないが鉄滓や八稜鏡などが出土している。と以上4点の共通点をあげ平地に営なまれている住居址との比較から山地遺跡の特徴としている。続いて、山地遺跡を構営した人々の性格、生業について言及し、1・2・3の特徴から山中流浪の山の民で、マタギ、木挽、木地屋、箕直し、鍛冶鑄掛屋等をあげ、さらに民俗学柳田国男氏の炭焼藤太の伝説や藤森栄一氏がとりあげた奥信濃秋山郷の人々の生活を例にひきながら、鑄物師などの特定の職にたずさわった人々の仮り住いの可能性が強いとし、また、移動的な狩猟のための住いの可能性もあると述べられている。そして、山地遺跡からは灰釉陶器が多く出土することや、遺跡の位置が山中を走る交通路、峠に当たっていることから、白瓷運搬の一翼を荷なった自由な民であろうと結んでいる<sup>(35)</sup>。

では現在、佐久地方ではこれら山地の遺跡はどのくらいの数に達するものだろうか。その前に山地の遺跡とは、どのような基準を当てはめたらよいかを考えなければならない。桐原氏は水稻農耕を生業とするには不適な地と一応の目安を設定している。

近代、佐久地方の水稻農耕の不可能な地域を考える時、昭和5年田中啓爾氏が「中央高地における米作り高距的限界線は、約1,100米に達し1,300米に至れば全く米作不可能である。又1,100米以下900米の地域は限界線の屈曲地域でそこは早稲本位栽培地であり……」<sup>(36)</sup>となされている。また、井出正義氏が調べた中世の記録によると、建武2年(1335)の大徳寺文書に鷹野郷(現佐久町高野町、標高740~760m)には水田が、確実にあったと考えられる記載がなされている。次に畑物村(現八千穂村畑、標高760~780m)では佃の書き方が他の郷村(平坦部の水田地帯)の場合と違うことと村の名称から類推して畑作ではなかったかと思われ、さらに保間(現小海町本間、標高800~820m)では、本畠と記載されており完全な畑作と考えられ、水田はなかった<sup>(37)</sup>。

のではないかとと思われるとのことである。さらに、井出氏の調査によれば佐久地方における古墳の南限は、佐久町高野町城陰の塚畑古墳（標高 740～760 m）と同町平林曾原の入沢20号古墳（標高 800～820 m）が当たるとされ、また、それに先行する弥生時代後期のまとまった集落址の南限もやはり佐久町高野町の佐久西小学校裏遺跡（標高 760～780 m）であり、弥生時代後期から南北朝時代の稲作の高距的限界線は、標高 750～800 m の範囲内に有り 900 m に至れば全く不可能な地域として問題はないと考える。

そこで、佐久地方における標高 900 m 以上の遺跡を高地遺跡と定義し「<sup>(39)</sup>全国遺跡地図一長野県一」<sup>(40)</sup>（1983）と「<sup>(41)</sup>遺跡地名表」（1981）を併用してこれらの遺跡を摘出すると188 遺跡知られており、その時代別数は第4表に示したとおりである。弥生時代の18ヶ所のうち5遺跡は磨石鏃、扁平片刃石斧の単独出土地で集落址とは考え難く、実質は13遺跡（約7%）に減るものと思われる。高地遺跡全体の各時代の割合は、縄文時代が8割を占め、弥生時代以降では平安時代が約4割に達するほど多く、弥生時代・古墳時代とその割合は減少している。<sup>(42)</sup>

次に時代別遺跡数からの割合を見ると弥生時代7%、古墳時代6%、平安時代13%となりいずれも平安時代の高地遺跡の占める割合は突出している。また、弥生時代から古墳時代の高地遺跡の割合は、若干であるが減少しておりこのような増加・減少については、人々の生産及び社会形態の変化に対応した現象と考える。<sup>(43)</sup>

先に桐原氏が集成した資料に若干の新資料を加えて高地・山地集落の調査報告例を第5・6表に示した。山地集落と高地集落にした理由は、山地集落の中には山中とはいえ小規模な稲作による生活手段の可能性が考えられ、高地集落は概念的には山地集落に包括されるものであるが、前者のような生活手段の可能性は一切考えられない点で分類した。しかし、単純に標高 900 m という基準線で画一的に社会形態を分割することはできないのでその性格・生業等についてはある程度包括的に押し進めてゆきたい。<sup>(44)</sup>

高地集落は群馬県の2遺跡の資料を加えて9遺跡16棟の住居址、山地集落は10遺跡17棟の住居址の存在が確認されている。しか

し、その他にも山地・高地集落の

概念に含まれない遺跡で単独に検出される住居址がある。佐久市小宮山の後沢遺跡では、弥生時代・古墳時代の集落址の中に平安時代の住居址が1棟だけ単独に検出されている。後沢遺跡は千曲川・片貝川により形成された広大な沖積

第4表 佐久地方の高地遺跡数と割合

時 代	高地遺跡(B)	割合(B/A)	遺 跡 数(C)	割合(B/C)
先 土 器	20	11%	41	49%
縄 文	152	81%	943	16%
弥 生	18	10%	271	7%
古 墳	9	5%	141	6%
奈 良	1	—	5	—
平 安	73	39%	561	13%
高 地 遺 跡 数	(A) 188		1,187	16%

地である野沢平を一望に見渡せる舌状台地に存在する遺跡で山地とは考えられない。同様な例が県内では長野市安茂里の平柴平遺跡<sup>(45)</sup>、時期は奈良時代であるが同様に単独で塩尻市塩尻棧敷の中島遺跡<sup>(46)</sup>で検出されている。このような例は南関東で中山吉秀氏（1976）が「離れ国分」として集成、分析されており上述の3例はあるいはその性格の一端を荷った人々の生活址かもしれない。<sup>(47)</sup>

高地・山地集落の遺跡の規模は、群馬県熊倉遺跡が特別で住居址と思われる凹地が40ヶ所確認されたとしている。他は新水遺跡の5棟が一番多く、1棟あるいは2棟の小規模の遺跡が一般的といえそうである。

竪穴規模は推定プランを含めて21棟の資料を使用して前掲した第17図佐久地方の住居址規模別分布図に入れると、最低規模は新水B遺跡第1号住居址の390×320 cmと稲葉遺跡N住居址の(350)×(350) cm、最大規模は乗落遺跡の630×(650) cmである。規模の分布は、佐久地方の住居址の規模で中型とされる中に9棟、大型に10棟、超大型に2棟と分布しており、中型規模の中でも中位から上位付近に偏っている。このことから山地・高地住居址の規模は決して平地の住居址（佐久地方の平地住居址）に比べて小さくはなく、むしろ大型の傾向がある。

カマドについては検出されている住居址が23棟あり、<sup>(48)</sup>そのうち横尾・兵士山・沖ノ沢・池尻遺跡の4棟は保存状態もよく、かなりしっかりした石組のカマドで平地の住居址と比較しても見劣りしないカマドだといえる。他の住居址のカマドについても平安時代のカマドは鬼高期のカマドに比べかなり雑に構築されているものが多くみられ、一概に山上の遺跡の方がラフだとは考えられない。

重複関係ではカマドのみ検出の位沢・沖ノ沢遺跡と土師器の出土だけで調査の行なわれていない中の坂遺跡を除くと蒲田、新水A2・3号住、七本松2号住、稲葉N住、竹之城原第4号住の5ヶ所で重複が見られる。他の26棟14ヶ所ではみられず平地との比較は行なわなかったが、必ずしも多いとはいえない。

出土遺物については、鉄滓、鉄製品が熊倉2号住、兵士山、井堀、七本松1・2・3号住、竹之城原第4号住、八丁原、池尻、稲葉、乗落の11棟とかなり高い率で出土しており、特に七本松遺跡第1号住居址では「工作址」的な見解があり、また、池尻遺跡においてはふいごが出土しており、原島礼二氏の鉄の流通から考えて野鍛冶の全国的な分布と関連させ「鍛冶址」の性格をもつ住居址かもしれないとしている。

次に灰釉陶器が多く伴出していることである。佐久地方の灰釉陶器出土例は、昭和29年「灰釉陶器の諸問題」で芦田村（現立科町）池ノ平、三都和村（現立科町）藤沢、本牧町（現望月町）印内の三ヶ所を出土地として記載されており、その中で大場磐雄氏は「将来必ずや相当量の発見例が追加されることを確信できる」と明言しておられる。<sup>(49)</sup>続く昭和31年「信濃史料第1巻考古篇上」では、立科村（現立科町）池ノ平、小諸市大塚原、穂積村（現八千穂村）鍛冶ノ入の3遺跡<sup>(50)</sup>

第5表 高地集落一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	立 地 (標高)	住 居 址 プ ラ ン (東西×南北)	カ マ ド	出 土 遺 物	時 期	備 考 ( 文 献 )
1	位 沢	南安曇郡安曇村	山 地(1,400m)	カマドのみ	石 組 カマド	土師器(皿)	平 安 時 代	桐原健(1978)「信濃における倣馬の党の考古学的考察」『中部高地の考古学』
2	横 尾	南佐久郡川上村	山 腹(1,354m)	隅丸方形 495×(495)cm	西 壁 南 寄 り	土師器(坏、甕)、灰釉陶器(皿、埴)、焼失住居址	0 - 53	本遺跡
3	山 本 畑	小 県 郡 真 田 町	山 麓(1,240m)	2 住 方形(350)×(400)cm 棟 2 住 " 440×385cm	北 壁 西 寄 り 東 壁 南 寄 り	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、小形広口壺)、灰釉陶器(坏) " (皿、甕)、" (耳皿、壺)	0 - 53	川上元・他(1977)「菅平高原山本畑遺跡」『長野県考古学会誌29』
4	熊 倉	群馬県吾妻郡 六 合 村	段 丘( 1,200m)	1 住隅丸方形 635×632cm 2 住 " 435×500cm 3 住 " 540×420cm 4 住 5 住 隅丸方形 586×572cm 6 住 " 422×448cm	南 壁 西 寄 り " 東 壁 中 央 東 壁 東 壁 南 寄 り "	土師器(皿、埴、甕)、平石 " (皿、皿、皿)、鉾滓 土師器少量、須恵器(皿、埴、甕) 土師器(皿、甕) 土師器(皿、甕)、須恵器(埴)、灰釉陶器(長頸壺)、平石 土師器、須恵器多し、平石	9 世 紀 中 葉 から 10 世 紀 前 葉	能登健(1983)「熊倉遺跡の再調査」『群馬文化193』 尾崎喜左雄(1971)「火山噴出物堆積と遺跡」『一志茂樹博士喜寿記念論集』 信濃史学会
5	明 星 屋 敷	諏 訪 市	台 地(1,030m)	1 棟		土師器(坏、甕)、須恵器(坏)、灰釉陶器(埴)	平 安 時 代 中 頃	中村竜雄(1968)「伊那と諏訪をむすぶ高地性遺跡」『伊那路12-4』
6	蒲 田	南安曇郡安曇村	山 腹(1,000m)	2 棟 ?		土師器(皿、埴、甕、鍬釜)、灰釉陶器(皿、埴)、緑釉陶器(埴)	平 出 第 5 ・ 6 様 式	中島豊晴・樋口昇一(1958)「長野県南安曇郡安曇村蒲田遺跡調査概報」 『信濃10-3』
7	里 宮	木曾郡王滝村	扇状地(975-982m)	長方形(375)×(440)cm	南 壁 西 寄 り	土師器(甕)、須恵器(甕)、灰釉陶器(皿、段皿、埴、瓶)	東 濃 系 虎 溪 山 1 号 窯 期 12 世 紀 前 半	神村透(1978)「御嶽神社里宮遺跡発掘調査報告書」
8	兵 土 山	佐 久 市	山 麓(970m)	隅丸台形 560×560cm	北 壁	土師器(坏、甕)、須恵器(坏、壺)、灰釉陶器(埴)、鉄製品、砥石	0 - 53	
9	井 堀	群馬県吾妻郡 草 津 町	台 地(960m)	不整方形 445×470cm	東 壁 中 央	土師器(埴、甕)、須恵器(皿、埴、甕)、灰釉陶器(皿?)、鉾滓	9 世 紀 中 葉	井上唯雄(1974)『井堀遺跡発掘調査報告』草津町教育委員会

第6表 山地集落一覧表

No	遺 跡 名	所 在 地	立 地 (標高)	住 居 址 プ ラ ン (東西×南北)	カ マ ド	出 土 遺 物	時 期	備 考 ( 文 献 )
1	新 水	北佐久郡望月町	山 麓(860～870m)	5 種 { A 1 住 隅丸方形(400)×400cm A 2 住 ×(385)cm A 3 住 A 4 住 カマドのみ B 1 住 隅丸長方形 390×320cm	東 壁 " " " "	土師器(坏、甕)、焼失住居址 " (皿、皿)、灰釉陶器 " (皿、皿) " (皿、皿) " (皿、皿)	10 世 紀 末 から 11 世 紀 初 頭	福島邦男(1981)『新水』望月町教育委員会
2	沖 ノ 沢	岡 谷 市	山 腹(860m)	カマドのみ	西 壁	土師器(坏、甕)	平 安 時 代	戸沢充則(1973)『岡谷市史 上巻』
3	竹 之 城 原	北佐久郡望月町	山 麓(850m)	方形 390×430cm	東 壁 南 寄 り	土師器(坏、甕)、灰釉陶器(皿)、鉄製品(紡錘車、釘、鏝、刀子)、焼失住居址	0 - 53	福島邦男氏の御教示による
4	七 本 松	松 本 市	山 腹(850m)	3 棟 { 1 住 2 住 3 住 方形 500×(450)cm	東 壁	土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、鉄滓 " 、 " 、鉄滓 土師器(皿、坏、甕、鉢)、須恵器(坏、甕、蓋、短頸壺、鉢)、灰釉陶器(皿、 埴、小口壺)、鉄製器	10 世 紀 後 半 から 11 世 紀 前 半	松本県ヶ丘高校風土研究部(1962)「三才山七本松遺跡調査概報」『信濃14-11』
5	御 所 平	佐 久 市	台 地(820m)	方形 410×(410)cm		土師質土器(皿、甕)	平 安 時 代 末	
6	八 丁 原	下高井郡山ノ内町	山 腹(800m)	不整方形 350×(450)cm	北 壁 東 寄 り	土師器(皿、甕)、須恵器(甕)、鉄製品	平 安 時 代	桐原健(1961)「長野県下高井郡山之内町八丁原遺跡調査略報」『信濃13-6』
7	池 尻	更 埴 市	山 腹(700m)	長方形 490×520cm	西 壁	土師器(坏、甕、皿)、鉄製品(斧、釘)、鉄滓、砥石 垂飾品、土製品(ふいご)	平 安 時 代	下平秀夫(1970)「長野県更埴市桑原池尻遺跡調査概報(2)」『信濃22-4』
8	中 の 坂	小 諸 市	山 腹(650～700m)	1 棟 ?		土師器(坏、甕)	平 安 時 代	花岡弘(1974)「中の坂遺跡の土師器」『小諸市誌歴史篇(1)』
9	稲 葉	長 野 市	山 腹(650m)	2 棟 { N 住 隅丸方形(350)×(350)cm S 住 " 500×520cm	東 壁	土師器(皿)、灰釉陶器 土師器、須恵器(甕)、灰釉陶器、鉄製品	平 出 第 5 ・ 6 様 式	永峯光一・鈴木孝志(1957)「長野県埴科郡松代町西条区入組稲葉遺跡調査概報」『信濃9-4』
10	乗 落	下水内郡栄村	山 麓(560m)	方形 630×(650)cm		土師器(埴)、須恵器(甕)、灰釉陶器(埴、水瓶、小口壺)、鉄製品、鉄滓、 八稜鏡	0 - 53	桐原健(1968)「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃20-4』

第7表 佐久地方の灰釉陶器出土遺跡一覧表

市町村名	遺跡名	備考	市町村名	遺跡名	備考
立科町 (2)	池ノ平	昭29・31年調査	佐久市	周防畑 A	昭54年調査
	信州林			〃 B	昭55年〃
望月町 (10)	笠森			中村	昭57年〃
	犬飼	昭53年調査		兵士山	昭54年〃
	寺久保 B			樋村	昭57・58年〃
	善郷寺 A		臼田町 (9)	菰の入	(蔵)高見沢勇
	新水	昭56年調査		月夜平	
	又久保	昭55年〃		月通沢	
	胡桃沢	昭56年〃		荒神出口	
	岩井	昭57年〃		山の前	
	金塚	昭56年〃		西の窪	
	竹之城原	昭58年〃		五霊西	
				馬寄	
				寺久保	
				丸井戸	
浅科村 (1)	堀久保		佐久町 (9)	たつま久保東	
小諸市 (6)	大塚原	高台付皿		影	
	小幡在家			施餓鬼畑	
	久保田	昭58年調査		雁明	
	宮の北	昭54・55年〃		宮の本	昭53年調査
	五ヶ城	昭55年〃		千手院	
	曾根城	昭57年〃		五領脇	皿(底部)
佐久市 (22)	裏林			サイカチ平	
	小倉		八千穂村 (2)	鍛冶ノ入	高台付皿
	扇平			蓬間	〃 2(完形)
	中屋敷		小海町 (1)	八の軽井沢	
	熊の堂		南牧村 (1)	中ツ原	
	蛇塚 B	昭55年調査	川上村 (3)	馬飼場	
	芝宮	昭54・55・57年調査		切草	
	一本柳	昭47年調査		横尾	本調査
	上桜井北	昭52年〃	臼田町については三石延雄氏より、佐久町、八千穂村、小海町、南牧村については井出正義氏より御教示賜わった。		
	三塚鶴田	昭50年〃			
	後沢	昭51年〃			
	中道	昭46年〃			
	上ノ城	昭48年〃			
	西八日町	昭58年〃			
	北西久保	昭44・57年〃			
	和田上南	昭54年〃			
	舞台場	昭56年〃			

知られており、この時点で佐久地方の出土例は5例であった。昭和43年「瓷器の道(1)」の中では上田市、小諸市、北佐久・南佐久・小県郡を含めて9例と紹介しており、出土例は増加していない。<sup>(51)</sup>しかし、近年佐久市・小諸市・望月町における緊急発掘調査や県史、各市町村が実施した分布調査等の成果により、爆発的に増加し第7表に示したように66遺跡に達している。現在、佐久地方においても発掘調査による平安時代後半の集落址では上小地区と同様にほとんど灰釉陶器<sup>(52)</sup>が伴出している。出土した灰釉陶器の種別では皿・碗形土器が一番多く長頸瓶や小瓶も見られ、皿形土器の中には段皿・輪花皿・耳皿などの種類も知られている。

佐久地方の灰釉陶器は東濃系のものがほとんどで、三塚鶴田・犬飼遺跡では美濃系のものが報告されており、入山峠遺跡には猿投系の皿が、<sup>(53)</sup>また、西八日町遺跡出土の長頸瓶は10世紀前半の猿投系のものであるとのことである。<sup>(54)</sup>しかし、佐久地方では折戸53号窯期のものがほとんどと考えられており、すでに述べられているように、この時期灰釉陶器は当地方でも広汎に人々の日常容器として使用されていたものと考えられる。<sup>(55)</sup>

山地・高地集落の時期は、9世紀中葉から10世紀前葉に井堀・熊倉の2遺跡が存在し、折戸53号窯期を10世紀中頃から11世紀初頭とすれば、該期に当る遺跡は、横尾・山本畑・明星屋敷・蒲田・兵士山・新水・竹之城原・七本松・稲葉・乗落の10遺跡となり半数以上を占める。このことは灰釉陶器が山上に多く出土するということではなく、広汎に普及した時期に人々の山間への進出が最も積極的に行なわれたものと考えられ、律令制が崩壊し荘園制に移行する時、東國の生産力が高まり灰釉陶器の需要が伸びたとされることと関係があろう。<sup>(56)</sup>平安時代の末、12世紀前半には里宮・御所平の2遺跡が存在する。

入間田宣夫氏(1976)によると、9-10世紀は摂関政治にいたる準備期間、古代村落の崩壊が進行するなかで中世村落形成の条件がしだいにかたちづくられる先行期としてとらえることができ、10世紀中葉は律令行政村落支配の最終的崩壊期であるとされており中世村落形成が次第に形づくられる時代に当たっている。さらに入間田氏は、その中で非農業民集団(鋳物師、檜物師などの手工業者)との不断の接触なしに中世の農業村落が再生産を維持することはできなかったとしこれらの社会的分業の展開なしに中世村落の形成はありえなかったであろうとしている。<sup>(57)</sup>このような時期(10世紀後半-11世紀前半)に山地・高地集落が最も多く存在することはあわせて考えてゆく必要がある。

では、これらの山地・高地集落の性格・生業についてであるが、桐原氏が述べているようにマタギ・手工業者(鋳物師・木地屋など)の存在は当然考えられる。しかし、さらに多角的方面から見ることもできると考える。

非農業民集団として池尻遺跡の鍛冶址、七本松遺跡の工作址などの手工業者集団(鋳物師、木地屋、杣人、檜物師、鍛冶など)の生活址、位沢遺跡のような大野牧の放牧場と関係した牧場的

性格をもった遺跡、また、里宮遺跡は御岳信仰との関連を扱っており山岳宗教関係の遺構も存在したと考えられる。さらに、非農業民集団と解してよいか疑問であるが、横尾遺跡はしばらく登ると信州峠があり、Ⅲ章でも述べられているように昔から甲斐と佐久を結ぶ重要な交通路であり、峠に関係した遺構と考える。他に山本畑・兵士山遺跡も同様な遺跡と考えられており、峠及び交通路に関係した遺跡は数多いと思われる。その他に狩猟関係の遺跡も当然考えられるが、高地遺跡の割合を算出した時、弥生・古墳時代を通じて最低6%は高地に生活している人々がおり、これらの人々を考慮する必要がある。

上述の非農業民集団の生活址は、桐原氏が述べているように一定期間（その期間は長くない）住んでは去って行く性格をもっていたものが多いと考えられるが、一方、それらばかりではなく住居址の規模が大型でカマドもしっかりしたものを有している住居址が存在することから、長期間にわたり定住した人々もいたと考えられ、能登健氏（1983）<sup>(58)</sup>が述べているように「畑作を基調にして、狩猟や山仕事に従事するという一つの生活様式」の農業民集団の山への積極的な進出・開拓も考えられる。

これらのことから平安時代の山地・高地集落については多方面からの研究が必要と考える。

尚、山村の成立期について落人伝説がある川上村は興味深く、さらに村内に存在する同時期の兵部・切草遺跡などから平安時代後半まで遡ると考えるのは飛躍であろうか。（高村博文）

註1 焼失住居址の基準としては、焼土・炭化材よりは、カヤを主体とした解体炭化物の存在が火災住居址としての必須の条件と考えられ、床面上覆土の炭化粒の頻度の考慮によるべきとの考えもあるが、本報告では特に基準を設けず、報告書の記載に従う。

註2 佐久市教育委員会（1976）『市道』

註3 佐久市教育委員会（1978）『跡部町田』

註4 佐久市教育委員会（1981）『下小平遺跡』

註5 小諸市教育委員会（1981）『五ヶ城』

註6 臼田町教育委員会（1980）『井上遺跡』

註7 望月町教育委員会（1981）『新水』

註8 昭和58年度発掘調査により検出されている。竹之城原遺跡については福島邦男氏の御教示による。

註9 小諸市教育委員会（1983）『曾根城遺跡』

註10 佐久市で北近津4棟・三塚三塚2棟・上桜井北9棟・下小平1棟・三塚町田1棟・跡部町田5棟・市道7棟・舞台場10棟、小諸市で関口B3棟・宮ノ北2棟・五ヶ城3棟・曾根城1棟、臼田町で井上3棟の51棟報告されている。

註11 清水田遺跡の3棟と中道遺跡の1棟は、報告書が未完のため除いてある。

註12 佐久市で上桜井北8棟・三塚鶴田4棟・戸坂4棟・周防畑A4棟・儘田4棟・三塚三塚1棟・



今井西原 3 棟・蛇塚 B 5 棟・舞台場 20 棟の 53 棟。小諸市で宮ノ北 6 棟・関口 B 3 棟・五ヶ城 11 棟・曾根城 6 棟の 26 棟。望月町で犬飼 3 棟・新水 5 棟・又久保 1 棟・金塚 3 棟の 12 棟。川上村の本遺跡を加えて合計 92 棟報告されている。

註13 比較的良好な状態で検出された例は、跡部町田 H 1 号住・下小平 H 1 号住・清水田 H 2 号住・五ヶ城第 7 号住・新水 A 第 1 号住がある。

註14 藤沢平治氏の御教示による。

註15 五ヶ城第 7・14 号住では梁、棟、桁材の一部と思われる炭化材が検出されている。

註16 屋根の構造は秋田県脇本小谷地遺跡埋没家屋第二家屋に類似しているように思われる。

永井規男 (1975) 「秋田の埋没家屋」『家』社会思想社

註17 註 2 に同じ。

註18 平井聖 (1975) 「床の構造よりみた古代の住居」『家』社会思想社

註19 高橋光男・熊野正也 (1983) 「板床存在の疑いがある竪穴住居について」『史館第 14 号』

市川ジャーナル社

註20 佐久市教育委員会 (1978) 『上桜井北』

註21 小諸市教育委員会 (1981) 『宮ノ北』

註22 小諸市教育委員会 (1980) 『関口 B』

註23 真間期の住居址については、近年、該期の報告例が知られるようになり、佐久市の舞台場遺跡 9 棟、小諸市の宮ノ北遺跡 1 棟・曾根城遺跡 6 棟と計 16 棟報告されている。

註24 佐久市教育委員会 (1980) 『周防畑遺跡』

註25 佐久市教育委員会 (1972) 『北近津・戸坂』

註26 佐久市教育委員会 (1983) 『舞台場』

註27 望月町教育委員会 (1982) 『金塚遺跡』

註28 佐久市教育委員会 (1980) 『蛇塚 B』

註29 丸山日出夫 (1981) 「長野県頭殿沢遺跡における竪穴状遺構 (1)」『日本建築学会北陸支部研究報告集第 24 号』

註30 佐久市教育委員会 (1976) 『三塚鶴田』

註31 上桜井北 H 2・11・13・15 号住、三塚鶴田 H 4 号住、戸坂 H 1 号住、儘田 H 1・2・3 号住、三塚三塚 H 2 号住、今井西原 H 4・5 号住、舞台場 H 14 号住、宮ノ北第 9 号住、五ヶ城第 2・3・4 号住の 17 棟。

註32 資料数が 55 と少ないため早急な判断はできないが第 17 図から便宜的に下記の分類を使用する。

	(最低辺長)	(最大辺長)
小 型 住 居 址	210～265 cm	258～312 cm
中 型 住 居 址	250～400 cm	308～490 cm
大 型 住 居 址	410～540 cm	460～559 cm
超大型住居址	600 cm 以上	600 cm 以上

註33 笹森健一氏がいわれているような「頂点にある棟木 1 本で垂木を支えた場合、主柱が不必要と

なり、いわゆる無柱穴の住居となる可能性がある」上屋構造の考え方もできる。

上福岡市教育委員会（1981）『埼玉県上福岡市内遺跡群埋蔵文化財の調査（Ⅲ）』

註34 永峯光一・鈴木孝志（1957）「長野県埴科郡松代町西条地区入組稲葉遺跡調査概報」

『信濃9-4』

註35 桐原健（1968）「平安期に見られる山地居住民の遺跡」『信濃20-4』

註36 田中啓爾（1930）「中央日本に於ける高地の人文地誌学的研究概報」『地理学評論第6巻8号』

に書かれているが、大正9年野辺山板橋ザッコ沢の1,320mの高地において井出沢伊助氏が水田を作ったとされており、現在は行なわれていないが川上村においても1,300m以上の高地に水田が作られていたとされる特殊例はある。

註37 信濃史料刊行会（1954）『信濃史料第5巻』

註38 佐久平における古墳の築造は、土屋長久氏も述べているように「水稻農耕による経済力の充実、蓄積なくしては考えられない」土屋長久（1970）「信州佐久平の後期古墳群について」『信濃22-5』とされており、佐久地方の最高地の古墳は、小諸市諸甲の天池（一杯水）1・2号墳（標高940～960m）であるが、これは生活址を見下ろす所に構築されたものと考えられ水稻耕作の高距限界とは直接関係ないものとする。また、南限とは佐久地方において南に下るほど秩父山系及び八ヶ岳山麓に近くなり標高が高くなるため水稻耕作の限界がどこまでできるかの目安となる。

註39 この場合高地性遺跡という名称が古くから使われているが、瀬戸内地方の比高差の高い遺跡の名称と混同しやすいため高地遺跡とした。また、従来の高地性遺跡の名称は、各時代にわたって使用されていたがこの基準はあくまでも稲作の高距限界で定義したものであるから、その意味で弥生時代以降を主に適用してゆきたい。

註40 文化庁文化財保護部（1983）『全国遺跡地図—長野県—』文化庁

註41 長野県（1981）『長野県史考古資料編全1巻（1）遺跡地名表』長野県史刊行会

註42 奈良時代の遺跡については、近年知られるようになってきたが、まだその数は多くなく統計処理の意味がないため省く。

註43 高地遺跡と遺跡数の算出資料が同一でないため正確な数字ではないが、一応の目安として統計処理を行なった。

註44 山地とは、山口源吾氏（1974）が『高距限界集落』の中で「一応、標高400m以上で山稜とこれに隣る谷底との標高差が100m以上の所とする」と定義しているが、その文意がよくのみこめなため、便宜的に標高400m以上で広い沖積地から離れた山中に存在する集落を山地集落とし、今後検討したい。

註45 長野県（1982）『長野県史考古資料編全1巻（2）主要遺跡—北・東信—』長野県史刊行会

註46 塩尻市教育委員会（1980）『中島遺跡』

註47 中山吉秀（1976）「離れ国分考」『古代61』の中にある離れ国分遺跡一覧表による各遺跡の標高は400m以上を有するものは1ヶ所しかなく長野県で検出される小規模な山地・高地集落にそのままあてはめることはできない。

- 註48 位沢、横尾、山本畑2号住、熊倉1～6号住、里宮、兵士山、井堀、新水A1～4号住、同B1号住、沖ノ沢、竹之城原、七本松3号住、八丁原、池尻、稲葉S住の23棟でこのうち熊倉遺跡についてはカマドの詳細な報告はないもののかなり大型の石組カマドが5棟あると報じられている。
- 註49 大場磐雄（1954）「灰釉陶器の諸問題」『地方研究論叢』
- 註50 信濃史料刊行会（1956）『信濃史料第1巻考古篇上』
- 註51 檜崎彰一（1968）「瓷器の道（1）」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』
- 註52 林和男氏（1977）が『菅平高原山本畑遺跡』の中で「上小地方のこの時期のすべての集落址から灰釉陶器が出土しているといっても過言ではない」としている。
- 註53 宮下健司氏の御教示による。
- 註54 赤羽一郎氏の御教示による。
- 註55 註51に同じ。
- 註56 註54に同じ。
- 註57 入間田宣夫（1976）「平安時代の村落と民衆の運動」『日本歴史4 古代4』岩波書店
- 註58 能登健（1983）「熊倉遺跡の再調査」『群馬文化193』

#### 4 御所平の流人伝説と地名

はじめ、Ⅲ章2 歴史的環境の中で、横尾遺跡に近い信州峠や、小尾道について甲州側には口碑伝説が多いが、信州側には皆無だとかいておいた。ところが、小尾道と直接関係の有無は別として、御所平に古くから流人伝説があるので記しておく。

小尾道は信州往還とも呼ばれ、御所平はその重要な宿駅に当り、ここを基点として十文字・十石・碓氷峠等への通行が想定されていた。そして黒森から12キロといわれる道路は、峠の手前から黒沢川の流路に沿ってその両岸に拓かれ御所平に到着している。御所平は確かに甲州側の古文書に多く出てくるように、小尾道を中心に重要な宿駅であり、通路の横尾山は、古くから牧場として、また、木材や桶子材の採取場として御所平にとって関係の深い土地であった。

12世紀の中頃、保元の乱に破れた崇徳上皇は、讃岐に流罪されたが皇子重仁親王の行方については流罪とも戦死とも知られていない。その重仁親王が、僅かの主従で落ちのびて住まわせられた土地が、この御所平という地名の発祥であると伝えられる。同じ筋の伝説が、隣り合わせの北相木と南相木の両村に伝えられていて、北相木より南相木へ、更に峠を越えて御所平に移られたという。親王が越えて来たという峠を臨幸峠と呼んでいる。親王峠の嶺で、はるばる都の空を願みて感懷を込めた歌を、

うちびさす都をいでて千曲川かみつせ遠くわれはきにけり

と詠ませられた。